

# 令和6年度新潟県立阿賀黎明高等学校第1回学校運営協議会 議事録

## 1 日時

令和6年5月16日（木）13時30分～15時

## 2 会場

新潟県立阿賀黎明高等学校 多目的ホール

## 3 参加者

委員6名（欠席者1名）

県教育委員会2名

（オブザーバー参加）

- ・阿賀黎明高校魅力化プロジェクト関係者7名
- ・阿賀黎明探究パートナーズ関係者3名
- ・阿賀黎明高等学校教職員5名

計23名

## 4 次第及び概要

（1）開会 校長挨拶（斎藤校長）

（2）会長、副会長選出（遠藤佐様を会長、猪俣一成様を副会長に選出）

（3）会長挨拶（遠藤会長）

- 全国町村教育長会にて文部科学省中央教育審議会ワーキンググループの指針について聞いてきた。少子化が進んでいる中で適正な規模を求めていくのがこれからの在り方ではなく、通学のしやすさ等を加味して適正に誰もが学べる機会を作るのが大事であり、その中で小規模校も出てくるといった話があった。
- CORE ハイスクールや地域連携をしっかりと進めなければならないという話も出ていた。コミュニティスクールや熟議の中で生まれてくる地域連携が文部科学省でも進めている取組の中で先駆的になっているのではないか。
- 中高連携を含め、日本の小規模校のモデルとしてやっていかなければならない。

（4）本校の状況説明（斎藤校長）

- コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）についての再確認
- 過去の熟議のテーマについて
- 在籍状況、進路状況、生徒の様子などについて
- 今年度の取組（現在考えていること）について
  - ・探究活動の充実
  - ・個別最適な学びの充実
  - ・阿賀津川中学校との連携型中高一貫教育の推進

(5) 令和6年度の取組

① 阿賀黎明高校スタンダードについて (UDL) (松永教諭)

- UD及びUDLについての説明
- 学びのユニバーサルデザインについて
- 学びのユニバーサルデザインの3原則について
  - ・「何を学ぶか」を提示する方法
  - ・「どのように学ぶか」という行動や表現のための方法
  - ・「なぜ学ぶか」という取組のための方法
- 阿賀黎明UDLスタンダードの策定に向けて

② 授業における地域との連携 (加藤コーディネーター)

ア 総合的な探究の時間

- 【1年生】・探究サイクルを体感する「ちょこプロ」
  - ・小さなプロジェクトをつくり、地域とつながる「福祉体験」
  - ・地域の方とともにプロジェクトをつくる「あがまちゼミ」
- 【2年生】・地域を舞台としたテーマ別プロジェクト活動及び発表会の実施

イ 学校設定教科「地域学」

- 【2年生】・「やってみる」から始まる地域との協働活動
- 【3年生】・地域協働を土台とし、他者の「やってみる」を引き出す活動

ウ 家庭科

- 【家庭基礎(1年生)】
  - ・阿賀町の社会保障制度や高齢者福祉に関する課題を知る「福祉体験」
- 【フードデザイン(2年生)】
  - ・地域の郷土料理や特産物を活かした献立考案、実習
- 【保育基礎(3年生)】
  - ・阿賀町の子どもの福祉について課題解決を体験活動で学ぶ「保育園訪問」

エ その他

- 【観光ビジネス(3年生)】
  - ・阿賀町役場まちづくり観光課と連携した授業
- 【中高連携】
  - ・地域学Aにおける中学校1年生と連携した授業の実施
  - ・総合的な探究の時間における中学校2年生と連携した授業の実施
- 【阿賀黎明探究パートナーズ】
  - ・黎明祭で「阿賀町おもっしえぞマルシェ」の開催
- 【職員研修】
  - ・地域の方々と教職員が共に理解を深め、認識を共有する研修の実施

③ 令和6年度地域みらい留学生募集活動について

- まなび体験会 (現地開催) 4回実施
- テーマ別オンライン説明会 5回実施
- 東京対面説明会 1回実施
- オンライン高校別説明会 月1回程度実施

## (6) 質疑応答

(猪俣副会長) UDLを初めて聞いた。高校独自で作成しているのか。

(松永教諭) 多くの学校で実情に合わせてスタンダードを作成している。

(遠藤会長) 生徒からの要望の中でロイロノートや classroom について出ていた。中学校での活用に対するギャップが起因しているように思う。高校ではどのように活用しているか。

(松永教諭) 各教科で活用している。

(遠藤会長) タブレットは持ち帰ることはできるのか。

(南部教頭) 可能である。

(斎藤校長) 電子黒板は使っているが、タブレット活用については教員間で差があるのではないかと感じている。classroom は使っているがうまく活用するところまでは至っていないのが現状ではないか。

(清田委員) 中高連携による生徒の反応や変化は中学校と高校それぞれでどうか。

(国本委員) 積極性が高まっている。高校生の様子を見て、中学生も意見出しが活発になってきた。様々な面で自分から進んでやる姿勢が見えている。

(南部教頭) 2年生中心だが、少人数ということもあり「高校生がリードしないといけない」「場をまわさないといけない」という意識がみられた。普段消極的な生徒も自ら動く姿が垣間見えた。感想もフィードバックをして場を回すプロセスが見えた。有益な取組だと見えた。

## (7) 指導・助言 (齋藤指導主事)

- 令和2年度に着任し5年目。毎年参加させていただいているが、意見を聞いて終わりではなく実効性のあるものとして動いていくことが大事だと感じている。
- 拡充事業について、十日町高校等、合計12校で配信授業を実施している。地域連携に関する事業に関してはモデルを波及させる意味で4件採択をしており、追加採択も見込んでいる。他地域にも拡充していくというものが検討されている。
- 県立高校の将来構想有識者会議が行われた。加速度的に少子化が進んでいる。1万1千人を切った。小規模校は地理的条件として残さなければならない。魅力づけの中で何をやるべきかは阿賀黎明がモデルとなると感じている。

## (8) 熟議

テーマ「スクール・ミッション、スクール・ポリシーを実現するための授業と地域連携について」

## (9) 閉会の挨拶 (猪俣副会長)

- 阿賀黎明高校の特色は小規模校、地域密着。5年を経過しているが、生徒たちが一番満足できる学校を作ることが大事。地域として関わりながら、生徒がどう思っているかというニーズを大事に学校運営協議会を進めていきたい。